

Title	英国社会運動史に就て (一)
Sub Title	
Author	小泉, 信三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1917
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.11, No.2 (1917. 2) ,p.256(84)- 265(93)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170201-0084">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19170201-0084</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

### 英國社會運動史に就て (一)

小 泉 信 三

英國社會運動史は如何に編む可きや。又何を記す可きや。産業革命時より今日に至るまで、英國勞働者階級の地位の上進之に干する思想の變遷、思想の變遷と相響應する社會組織社會制度變革の跡を尋ねて之を記す可き材料の餘りに豊富にして餘りに多岐なるに惑はざる可し。試みに英國社會運動史の内容として逸す可らざる諸問題を數ふれば吾人は先づ十八世紀末年及び十九世紀初頭に於ける社會主義共產主義的思想家の一群を看過すること能はざる可し。其主なるものとしては「政治的正義論」(I)の著者キリヤム、ゴツドキン以下トオマス、ホ

ヂスキン、キツヤム、トムソン、ジョン、グレエ、チャアルス、ホール、ブレイ等を數ふ可し。而して是等社會主義者の思想を論ずるに當つて彼等に最も強き影響を與へたる人として一方に於ては經濟學者リカルドオ他方に於ては學者にして志士にして實業家たるロバート・オオエンの名を忘る可らず。オオエンは獨り社會主義の先驅者の一人たるに止まらず英國工場法の發達、職工組合、消費組合の發達の上に多大の貢獻をなしたること世人周知の如し。左れば英國社會運動史を編むもの特にロバート、オオエンの一章を設けて此人の思想と事業とを録するも不當なりと云ふ可らず。ゴツドキン等諸家の近世社會主義に對する貢獻に就て世人の注意を促がしたるもの、中「勞働全收權論」(2)の著者埃太利の法學者アントンメンガーは恐らく其最初の一人なる可し。メンガーは獨乙の科學的社會主義の地位を稍々懷疑的の眼を以て眺め、カアル、マル

クスの系統は決してマルクスの獨創にあらずして彼が十九世紀初年の英國社會主義者に負ふものなりと斷言せり。メンガーの此書は英譯せられフオツクスエルの苦心に成る序文と共に公にせらる。フオツクスエルはメンガーの所論を補ひ英國社會主義者の最重要なるものとしてゴドキン以下前掲の六家を舉げ、更に添ふるに精細なる書史を以てしたり。此書史必しも脱漏なきにあらず、猶ほ加ふ可きもの多しと云ふものあれども、此方面の涉獵者の爲めに研究の指針を是之に依て與へらる。是等社會主義者の學説はそれ自體としても研究の價值あること勿論なれどもカールマルクスが是等諸家に學びたりとの説あるに由て一層重要を加へ來れることは争ふ可らず。前掲メンガーは「分配論」の著者キリヤム・トムソン(3)を以てマルクスの思想上の父なりとしフオツクスエル、エツプ、グラアムツォレス等は「資本の要求に對して勞働の爲めに辨

す」(4)及び「民衆經濟學」(5)の著者トオマス・ホヂスキンを以て之なりとなす。之に對して種々反對論あれども、本篇の主旨に非ざれば今詳しく之に説き及ばずこと能はず。次に是等社會主義説と相關聯して社會運動史の若干章を割かざる可らざるものはチャーチスト一八三〇年より五〇年に至る憲章黨運動なり。表面に現はれたる限りに於て憲章黨運動は政治上の改革要求に外ならざれども其根底に潜める意義は經濟的社會的にしてブレクタアノは之を以て「十九世紀に於ける最初の社會民主的運動」なりと云へり。憲章黨運動に干しては文献太だ多からざるに似たりガムメエジの「憲章黨運動史」(6)以外にグラアム、フレス(7)の「ブルグレエツ經濟學字典ブレクタアノ」(8)がコンラツド國家學字典、及びグルンベルヒがエルスタア經濟學字典への寄稿(9)は其最も重なるものなる可し。千八百五十年に入り憲章黨運動鎮靜に歸し

て後大凡三十年間英國労働者運動は溫和なる自力自助主義に支配せられ、其運動の中心をなすものは職工組合及び消費組合となれり。職工組合運動の歴史に就ては既に今日古典となれるエツプ夫妻の大著姉妹篇(10)あり。研究者は常に安心して資料を之に仰ぐ事を得可し。消費組合運動に干してはピヤトリス・ポッター(後のエツプ夫人)の英國組合運動史(11)あり。英國消費組合の其後の發達は種々の増補と修正とを此書に向つて要求すれども而かも大體に於て此書は職工組合運動に於けるエツプ夫妻の二大著と等しく、消費組合運動に干する標準作として一般に承認せられんとしつゝあるなり。

千八百八十年を以て英國社會運動は一新時期に入る、即ち此時代に於て一方に於てはチャアチズムの鎮靜と共に冬眠に入りたる社會主義思想の復活あり、他方に於ては無精練労働者間に於ける職工組合の普及と共に漸く個人主義より

たる一群の青年はフエビヤン協會を組織せり(一八八三年)シドニー・エツプ及びバアナアド・シヨウ就中最も聞ゆ。ヘンリー・シヨウジは社會主義者に非ず、然れども其地代論並に土地國有論は自ら無勤務所得なるもの、本質に就て人の注意を促がし、地代以外に地代と性質を同ふする所得果して之なきやと云ふ點に注目せしめ、結局、凡べての無勤務増價は凡べて之を國家の中に收む可しとの主張に導きたり。今日と雖もエツプ等は其集産主義の論據を説明するに地代論を以て始む。シヨウジの影響猶ほ其跡を止むるを見る可し。以上二團體の外に猶ほキリヤム・モオリスを創立者とする社會主義者團結あり。始め社會民主同盟の一分派の觀ありしが、モオリスは近代の工場工業、機械的生産に對して反感を抱き此點に於ては時勢に逆行せんことを求め、他の一方に於ては國家の個人に對する強制を忌む事甚しく、集産主義に背きて漸次無政府

社會主義に傾ける新職工組合主義の舊組合主義を壓して、職工組合運動全體に著しき急進的革命的、階級争闘的色彩を帯びしむるものあり。一八八九年の倫敦船渠労働者同盟罷工の成切は新職工組合主義の決定的勝利を宣言するものと稱せらる。社會主義思想の復活に就ては二人の影響の看過す可らざるものあり。當時逃れて倫敦に客たりしかアル・マルクス及び米國より渡來して土地單稅運動の遊説を試みしヘンリー・ジヨオジ即ち是なり。マルクスはブリチシユ・ミユージヤムの附近に寓し、日々ミユージヤム圖書館に入りて「資本論」著作の業を勵みつゝありし間に於ては彼の影響は少數外國人の間に止まりて未だ廣く一般英國労働者の上に及ぶことなかりき。マルクスの影響は其の心酔者ハインドマンを得るに及び、社會民主同盟(一八八一年)となり始めて實際上の一勢力として現はれたり。一方に多くヘンリー・ジヨージの影響を被り

主義的色彩を鮮明にするに至れり。一八八〇年代に於ける社會主義の復活に就ては其經過の大體を記せるものにシドニー・エツプの「英吉利に於ける社會主義」(12)あり。プロオガム、非リエの「英國に於ける社會主義運動」(13)も亦參考に供することを得可し。ハインドマンのカアル・マルクスより受けたる影響に就てはハインドマン自らをして語らしむるに如かず。彼の自傳は「多事なる生涯の記録」(14)及び「追憶補遺」(15)と題して公にされたり。彼がマルクスに基づきて社會主義を唱へたるは「社會主義の歴史的基礎」(一八八三年)(16)に於てなること既に人に知らるフエビヤンインサチイの創立時以來今日に至るまでの經過に就てはエドワア・ピースの近著「フエビヤン協會史」(一九一六年)(17)あり。余は未だ此書を手にはせざれども、著者は協會の幹事に於て最も善く事情に通ずる人なれば必ず信據す可き記録なることを疑はざるなり。アアチボル

ド・ヘンダアソンの「ジョージ・バーナード・ショウ傳」(18)も亦一八八〇年代の青年が如何なる昂奮を以てヘンリイジョージの演説を聴き如何なる経路を経て社會主義の結論にまで導かれしかを善く描けり。フェビヤン一流社會主義の古典となれるものはショウ・エツプ・クラック・ワレス等の論文を集めし「フェビアン諸論」(18)なり。而して職工組合運動に於て新舊兩主義が相衝突し新主義漸次舊主義を壓倒して年々の職工組合大會を左右するに至りし事實に至ては何人も復たエツプの「職工組合史」以上に詳しく之を叙説すること能はざる可し。

英國社會運動史は一八八〇年に於ける復活を述べたる後に何を語る可きか。思ふに労働者の政治上に於ける運動は最も適當の題目なる可し労働者が其代表者を始めて議會に選出したるは決して新しき事實に非ず、既一八七四年炭坑夫は二人の議員をエストミンスターに送りしが是

等議員は何れも自由黨に席を連ね、特に労働者階級を代表する獨立の政黨は存在せざりき。労働者階級の獨立代表を標榜して起りたるを獨立労働黨とす。一八九三年ケヤハアデーを主腦として組織せらる。獨立労働黨は職工組合の重要な役員を黨員とし其功績は職工組合の間に社會主義を普及せしむると同時に職工組合を動かして政治的運動の必要を覺らしめたる事に存すと云はる。斯の如くにして一九〇〇年労働代表委員會は組織せられ、労働代表委員會は更に一轉して今日の労働黨となれり。労働黨は其數量的勢力の基礎を職工組合に置き、フェビヤン協會及び獨立労働黨なる二社會主義團體之に加はつて組織せらる。英國労働者の政治運動に就ては労働黨出現までの経過は前掲エツプの職工組合運動史に詳なり。千九百六年の總選舉に於ける労働黨の成功は近年の大事事件なれども之に關する論評は新聞雜誌に現はれたるもの多く單行本

としては參考す可きもの比較的少なし前掲ギリエーの「英國社會主義運動史」には八〇年代に於ける「復活」より労働黨出現に至るまでの記述あり就て見る可し。ロオレンス・ロオエルの「英國政治論」(19)の第二卷も労働黨の爲めに一章を割けり論述簡明にして信據するに足る。此外労働者の議會代表のみを主題として書かれたるものにハムフレエの「労働代表史」(20)あり獨創の著述を以て許すこと能はざれども、之と同じ題とを取扱ひたる書他になきを以て一見す可きか。

一九〇九年は英國社會政策の歴史に於て記憶す可き年なり。ロイド・ジョージの「人民豫算」此年を以て提出せられ、國立労働取引所此年を以て開始せられ、救貧調査委員會の報告此年を以て發表せらる。而して英國が濠洲の労働立法に學びし最低賃銀法も亦此年を以て制定せらる。千八百二年幼兒道德保護法に始まりて幾多の變遷を経たる英國工場法の發達は最低賃銀法に至

て當然歸着す可き結論に到達したるもの云はざる可らず。即ち之を機會として英國工場法の變遷を叙するは最も當を得たる業なる可し。英國工場法は其由來最も古く之に關する文書亦頗る豊富にして一々擧ぐるに勝ふ可らず。余がハッチンス、ハリソン兩嬢の共著に係る「英國工場法史」(21)を擧ぐるは、之を以て唯一の良參考書となすの意に非ず、たゞ千八百二年以來千九百〇九年の最低賃銀法に至るまでの發達を一瞥の下に了解せしむる簡明なる記述他に求め難きを以てなり。而して英國工場法の沿革を學ぶ者の看過す可らざるは法律制定の根本に横はる思想の變革即ち是なり、即ち始めは單に自由放任主義に對する制限として消極的の意味を有するに過ぎざりし工場法が如何にして十九二十兩世紀の交に於ては積極的系統的なる國民的最低限の政策として主張せらるゝに至りしか、之れ吾人に取りて最も興味ある問題たらざるばあらざるな

り。舊社會政策に對する新社會政策の相違は單に條文規定の末のみに注目するもの、思ひ及びざる重大なる意義を有す。而して新社會政策發途の紀念碑として一讀を要するは前記救貧法調査委員の報告なり。此報告(22)は多數者意見と少數者意見との二部より成る。多數者少數者共に救貧法の根本的改革を必要とするに於ては一なれども少數意見は一層急進的にして救貧法其者の撤廢を要求す。即ち救貧の原則に代ふるに防貧の原則を以てせんとするものなり。

一方に於て労働者は労働黨の組織に成功し、他方に於て工場法の發達は最低賃銀法の制定に至つて一新時期に入れり。是れより後の發展を叙するは社會運動現代史の任務なる可し。さて現代史は何を語る可きか。英國労働者は労働黨の成功に酔ひて一時過大の希望を之に繋ぎ労働黨は即ち政治運動は彼等の求むる如何なる物をも與へ得可しと空想したり。然れども労働黨の

成し得たる所のものは少なし、恐らく千九百六年の職業争議法の制定は其唯一のものなる可し。労働者は失望せざることを能はず。偶々サンデカリズムは此時に當つて佛蘭西より渡來せりしか。サンデカリズムは英國労働者に果して何を教へ英國労働者間に於て深き根帯を植うる事能はざりしが、その議會政策の否認、集産主義に對する攻撃は労働黨の前途並に集産主義の前途に就て反省を促がす原因を作れり。労働黨は未だ彼等の全運命を托するに足らず、同時に集産主義も亦彼等の求むる凡ての物を與ふること能はざるを覺ると共に、労働黨に満足して一時忘れんとしたる職工組合の運動に彼等は再び新なる自覺を以て力を注ぐに至れり。大凡そ千九百十年以來の所謂労働不安は斯の如く解釋す可きものなり。而して再び力を職工組合運動に注ぐと同一に彼等の一部には舊時の如く職工組合を以て單

に賃銀引上時間短縮の機關とのみ見るを以て満足せず、更に進んで職工組合を手段として賃銀制度其物に何等かの變更を加ふること不可能なりやの點に思ひ及ぶものを出だすに至れり。即ち近來頻りに Control of industry なる語の用ひらるゝ所以にして、雜誌「新時代」一派に依て唱へらるゝギルドンシヤリズムの如きも亦此時勢の産物と見るを適當とす。英國労働者運動の最近の發展に就て最良の参考書はコオルの著「労働の世界」(23)ならん。職工組合運動に於ける最近の傾向、佛蘭西合衆國及び獨乙の職工組合運動より英人の學ぶ可き點、労働者の政治運動の現在將來及び其限界、職工組合と消費組合との關係等に就て讀者は豊富なる材料を此に見出すことを得可し。但し著者はギルドンシヤリズム主唱者の一人にして獨斷の見少なからず。或は此書を以てエツプの「インダストリアルデモクラシー」に比較するものあれども固より溢美の

譏を免れざる可し。ギルドンシヤリズムに就て知らんと欲するものはオレエジの「ナシヨナルギルツ」(24)を見る可し。以上余は少しく英國社會運動史を編むに當つて逸す可らざる個々の問題を列擧し、夫れ々其方面に關する代表的著作と見る可きものを紹介したり。その之をなすの意は個々の方面に就ては斯の如く先人の述作既に備はれりと雖も、是等各方面を綜合し通觀したる英國社會運動史とも稱す可きものは未だ存せざる事を云はんとするにあり。ベエアの「英國社會主義史」(25)は光榮革命時代に筆を起して十九世紀初年の社會主義、チャアチズム、八十時代に於ける「復活」より最近労働黨の出現にまで及び、編述の體裁亦最も備はれりと雖も、著者はマルクス正統派の一人にして我執の見を以て判斷を左右すること稍々過ぎたるの觀あり。且つ本書の目的は其標題の示すが如く英國に於ける社會主義思

想の發達を叙ぶるにありて職工組合消費組合運動及び工場法の沿革に就て記す所甚だ少なきは固より其處なり。余が次節に於て其大要を紹介せんと欲するエッセの近業英國社會運動史はもと劍橋大學編纂近世史の爲めに執筆されたるものにして近比別に單行の小冊として印刷せられたり題して Towards Democracy? (26) と云ふ、數十頁の小篇にして記實も論評も共に精細なること能はずと雖も能く、過去七十五年間に於て英國社會が、地方制度の改革、消費組合、工場法、職工組合の發達、共濟組合、國家保險等の道程を通じて漸次個人主義より社會主義に向ひつゝある事實の大略を描けり、即ち其要旨を左に紹介する所以なり。

註、右に擧げたる諸書の原名標題を掲出の順序に従つて列記すれば左の如し。

- 1) *Godwin, William*, Political Justice 1793.
- 2) *Menger, Anton*, the Right to the Whole

Produce of Labor, with preface by H. S. Foxwell 1899.

- 3) *Thompson, Williams*, The Distribution of Wealth most conducive to Human Happiness 1824.
- 4) *Hodgskin, Thomas*, Labour defended against the Claim of Capital. 1825
- 5) *Same*, Popular Political Economy, 1827
- 6) *Gannage*, History of the Chartist Movement 1894.
- 7) *Graham Wallas*, Art. "Chartism" in Palgrave's Dictionary of Political Economy.
- 8) *Brentano, Leo*, Art "Chartismus" im Conradtschen Handwörterbuch.
- 9) *Grimberg, Carl*, Art. Chartismus im Elsterschen Wörterbuch der Volkswirtschaft.
- 10) *Webb, Sidney Beatrice*, History of Trade Unionism. 2nd ed. 1896
- 11) *Same*, Industrial Democracy. 1897
- 12) *Potter, Beatrice*, (Mrs. Webb) Cooperative Movement in Great Britain, 2nd edition,

1893.

- 12) *Webb, Sidney*, Socialism in England, 2nd edition 1894.
- 13) *Valliers, Brougham*, The Socialist Movement in England 1908.
- 14) *Hyndman*, The Record of an Adventurous Life, 1911.
- 15) *Same*, Further Reminiscences 1912.
- 16) *Same*, The Historical Basis of Socialism in England 1883.
- 17) *Pease, Edward*, History of the Fabian Society, 1916.
- 18) *Henderson, Archibald*, George Bernard Shaw 18<sup>a</sup>) Fabian Essays in Socialism.
- 19) *Loxell, L.*, The Government of England Vol. II. 1912.
- 20) *Hampshire*, History of Labor Representation 1911.
- 21) *Hutchins & Harrison*, History of Factory Legislation 1912.
- 22) Report of the Poor Law Commission 1909.

(Cd4499)

- 23) *Cole, G. D. H.*, The World of Labor 1913.
- 24) *Orange A. R.*, National Guilds 1914.
- 25) *Beer M.*, Geschichte des Sozialismus in England, Leipzig 1912.
- 26) *ebb, Sidney*, Towards Social Democracy? A study of Social Evolution during the past 3/4 of a century. 1916.